様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２９　年　　６　月　２６　日現在

機関番号：　１４７０１
研究種目：　挑戦的萌芽研究
研究期間：　2014～2016
課題番号：　２６５８０１４３

研究課題名（和文）観光に焦点をあてた歓待についての地理学的研究

研究課題名（英文）A geographical study on hospitality by focusing on tourism

研究代表者
神田　孝治（KANDA, Koji）

和歌山大学・観光学部・教授

研究者番号：９０３８２０１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，観光に焦点をあて，歓待について地理学的に考察を行った。歓待についての研究はこれまで，「① 神への信仰と歓待の関係」，「② 無制限の歓待とその制限の関係」，「③ 現代社会におけるサービスと歓待の関係」，という三つの観点に注目して主として検討が行われてきたが，文化社会的関心に基づく①・②と，経営的関心に基づく③の関係性についての考察がほとんどなされてこなかった。そのため本研究では，現代資本主義社会おける象徴的な歓待現象である観光に注目し，与論島と沖縄本島を事例としてこれらの関係性について検討した。

研究成果の概要（英文）：This research conducted a geographical study on hospitality by focusing on tourism. Previous hospitality research has mostly examined the following three perspectives: (1) hospitality and religious beliefs; (2) unlimited hospitality and its limitations; and (3) hospitality and services in capitalistic society. However, there has been nearly no consideration of the relationships among (1) and (2), which are based on sociocultural interests, and (3), which is based on economic interests. Therefore, this study examined tourism, which is representative of hospitality in capitalistic society, and the abovementioned relationships by focusing on specific places. In particular, the study analyzed the examples of Yoron island and Okinawa main island in Japan.

研究分野：　人文学

キーワード：　歓待　観光　人文地理学

１．研究開始当初の背景

歓待（ホスピタリティ）については，これまで大きく分けて三つの視点から研究が行われてきた。一つは，「① 神への信仰と結びついた古代から行われる無条件の歓待について，その排除無き受け入れの精神を称揚する哲学的研究」である（代表的な研究に R.シェレール(安川慶治訳)『歓待のユートピア―歓待神礼讃』現代企画室，1996.がある。）。二つ目に，そうした「② 無条件の歓待と，実際に執り行われている条件付の歓待との関係性について考察する哲学的ないしは社会学的研究」である（代表的な研究に，J.デリダ(廣瀬浩司訳)『歓待について―パリのゼミナールの記録』産業図書，1999.がある。）。そして三つ目が，「③ 現代のサービス産業社会において，ホスピタリティ（歓待）の果たす役割を強調する経営学的研究」である（代表的な研究に，P.コトラーほか(平林祥訳)『コトラーのホスピタリティ&ツーリズム・マーケティング』ピアソン・エデュケーション，2003.がある。）。

これら三つの視点のうち，文化や社会をテーマにする研究においては主に，①を前提とした②の視点から研究が行われてきた。しかしながら，一般社会，および経営学の領域では英語の hospitality（日本では片仮名表記の「ホスピタリティ」がしばしば用いられる）が③の視点から論じられ，また観光研究における歓待もほぼこの文脈でのみ検討が行われてきた。このように，①および②の視点と，③の視点は，学問的関心と連動するなかで乖離する傾向にあり，観光については①および②の視点からみた歓待についての研究が管見の限りほとんど見受けられない状態にあった。また，地理学においては，歓待についての議論は管見の限り①および②の視点が中心であり，③についての視点やそれを観光と結びつけきちんと論じたものは見当たらなかった。

２．研究の目的

本研究では上記の状態をうけて，①と②の視点で検討されている歓待の文化社会的問題と，③の視点から考察されているその経営的問題の関係性を，観光に注目して検討することとした。そしてこれらの関係性を考察するにあたっては，地理学的に特定の場所における状況に注目すると理解しやすいと考え，具体的な観光地を事例として取り上げることにした。調査対象地としては，歓待が観光の重要な観点となっていると想定された，奄美・沖縄とした。また時代としては，近代における観光黎明期から現代までを取り上げ，社会的コンテクストの違いによる変化にも焦点をあてることにした。

３．研究の方法

理論的な検討を行うために，歓待・観光関係を中心とする関連文献をレビューした。また，奄美と沖縄における関連資料を収集するとともに現地調査を実施し，得られた情報を分析した。

４．研究成果

(1)　与論島を事例とした考察

奄美における事例としては，特に奄美群島の南端に位置する与論島をとりあげた。1953 年から 1972 年まで南西諸島における日本最南端の島は与論島であったが，同島は 1960 年代中頃から観光地化が進行し，1967 年に海中公園候補地となって海の美しさが知られるようになると，日本のハワイなどと呼ばれて積極的な売り出しがなされ，1972 年のある雑誌記事では知床と並ぶ日本の代表的観光地として位置づけられていた。また当時の観光客は，統計データや聞き取りの結果から，学生の比率が高く，性別としては女性が多くを占めていたと考えられた。

こうしたなかで観光客は，名も問われぬことを希求しながら，与論島に「自由」を求めており，同島に無条件の歓待を期待していたことが認められた。また，あわせて現地の風習に注目するなかで男女の「恋愛」もそこに期待していたが，これら二つがあわさるなかで，当時の週刊誌は同島に過剰なまでの乱れた性的イメージを投影していたことがわかった。そしてかかる状況のなかで，当初は観光客を歓迎していた地元住民が反発するようになり，観光客の襲撃事件が発生したり，性的な振る舞いを禁じる看板が設置されたりといったことも行われるようになったことが認められた。特に 1971 年に発行された週刊誌において同島の乱れた性に関する状況が喧伝されたことが地元住民の大きな反発を呼び，かつ遺骨やサンゴの盗難事件，物価の高騰，水不足，ゴミ公害，島民の心の退廃などのいくつもの悪影響が生じるなかで，1971 年の現地におけるアンケートでは住民 96 人中 80 人が観光ブームに反対するという事態となったことが判明した。

このように，歓待からその制限へという動きが 1970 年頃に生じていたが，一方では観光振興にともなう経済的利益を期待する声も根強く，バランスの良い観光のあり方が希求されていたことも認められた。そして 1979 年をピークとして観光客数が漸減するなかで，1983 年にパロディ国家の「ヨロンパナウル王国」を建国したり，1984 年にギリシャのミコノス島と姉妹盟約を締結し，その後にミコノス島をテーマにしたまちづくりを展開したりするなど，官民一体となって新しい観光資源の創出を図るための活動がなされるようになったことがわかった。観光客の減少に対応するなかで，その歓待を制限する動きから，積極的に歓待に向かう動きへと，現地の住民・行政の主たる対応が変化していったと考えられた。

そしてこうした観光客の歓待にかかる注目すべきものとして，与論献奉と呼ばれる歓

待儀礼が見出された。これは，「『大切な客人を歓迎します。』というおもてなしの心」を意味するなどとして紹介される，参加者各人が口上を述べた後でそれを回し飲むという飲酒の儀礼であり，民宿などの多くの観光施設で執り行われているものである。かかる儀礼は，祖先神に酒を捧げた後で家長が酒をふるまう大杯（ウーチブ）と呼ばれる儀礼が元になったとされ，その飲酒には強制力がともなうものであった。そしてこれが 1960 年頃に「与論憲法」と呼ばれるようになり，観光ブーム時には観光客に対する強制的に飲酒させるという状況が生み出されていたことが認められた。そしてこうしたなかで観光客の反発の声も出るようになり，「与論に来るお客様は皆神様」という発想のもと，「観光客を迎えるもてなしの心」を重視して，1979 年に「与論献奉」という名前が用いられるようになり，強制ではなくコミュニケーションを重視したルールも制定されるようになったことが判明した。祖先神と結びついた飲酒の儀礼が，観光振興を目的とするなかで，来訪する神としての観光客という観念に基づき，強制飲酒からおもてなしの飲酒という儀礼に変化したことが理解された。

さらに，興味深い歓待のあり方として，2007 年に上映された映画『めがね』とそれに誘引された観光客にかかるものも見出された。これは 1970 年代の観光ブーム時と同じく，来訪者が自由を求めるものであるが，そこでは「たそがれる」という活動が提起されていた。この「たそがれる」という活動は，恋愛を含む積極的な諸活動の対極にあるもので，いわゆる「観光」とは異なるものと位置づけられていた。また，そこでは現代社会の固定化された常識・ルールとともに，資本主義社会におけるサービスとしてのホスピタリティは否定され，自由な歓待のあり方が提起されているという特徴を持っていたことが判明した。そして，こうした映画に触発され，主として 20 代後半から 30 代の女性が同島を訪れるようになっており，そこを都市での疲れを癒す島と位置づけるようになっていることが認められた。聞き取りの結果，こうした観光に対して地元住民からの反発はなく，また行政も含めてこれを観光資源とした観光振興の意向は強いものがあった。ただ，サービスとしての歓待や観光を否定する映画の内容がために，それを積極的に活用することが困難にもなっているという状況が明らかになった。

さらに，こうした観光客の歓待には，来訪者であったはずの元観光客が大きな役割を果たしていたことも認められた。1970 年代の観光ブーム時から，観光客の歓待は主として観光客が行うという状況になっており，こうした人々が観光事業者に転じ，移住して現在まで観光関連産業で働いている場合が多いことが判明した。さらに，観光客の減少期においてこうした元観光客が積極的に観光振興のための取り組みを行っていることが認められると共に，古くからの地元住民とも連動したハイブリッドな主体となって活動を実施していることがわかった。このように，既存の歓待の議論とは異なり，観光振興にかかる歓待は単純に内と外を単純に分離することが出来ない状態になっていると共に，来訪する他者への愛というよりは，来訪者の地域への愛が大きな役割を果たすという状況にあることが判明した。

(2)　沖縄本島を事例とした考察

与論島では，遺骨の盗難など，死を対象とした観光は非難の対象となったが，沖縄本島では「南部戦跡」を対象とする死と結びついたテーマの観光が長きにわたり行われてきた。そこで沖縄本島を事例とした考察では，本研究課題のさらなる検討のため，観光客の歓待にあたって問題が生じがちな死をテーマとする観光（ダークツーリズム）に特に注目した。なかでも，祖先神などの神との関連もある墓地を取り上げるとともに，歓待現象を生じさせる移動の問題に焦点をあてて考察を行った。

沖縄観光は，大阪商船を中心とする海運交通の発達を背景とし，1937 年にはじまる同社企画の沖縄団体旅行などを通じて，戦前期にはじまったが，当時から沖縄の墓地が観光対象となっていたことがわかった。亀甲墓を中心とした沖縄の墓が，洋風イメージなどを喚起する奇観として，洗骨がなされる奇習の地として，墓の形状から来る女性イメージを喚起する対象として，そして清明祭をはじめとする余暇の場所として，注目を集めていたことが認められた。

なかでもその焦点となったのは，那覇市の北西沿岸部にある辻原墓地であったことが判明した。同地は，大阪商船の船が那覇港に入る際に船上から見える象徴的な景観であったばかりでなく，多くの観光客が訪れる辻遊廓にも近かったため，観光客の移動との関係で注目されていたと考えられた。こうしたなかで同地は，沖縄南部においてなされた 1933 年からの投票を経て決定された南沖縄八景の一つにも選ばれていたことがわかった。

しかしながら，かかる墓地に対して，外来者と地元住民にはその見方に大きな溝があったことが認められた。例えば，柳宗悦ら日本民芸協会会員を中心とする外来者と，沖縄県警察部長や琉球新報社長などの沖縄県側の人々が沖縄の観光振興について話し合った 1940 年の「沖縄観光と文化を語る座談会」においては，墓の保存を求める柳ら一行とその破壊を求める沖縄県警察部長とで意見の対立が見られた。こうした墓の整理を求める意見では，洗骨にかかる衛生問題，土地の利用問題，そして莫大な費用を要するという経済上の問題が主として指摘されており，那覇市の観光地化を図るにあたっては非芸術的

で風致を害する墓地を排除すべきという言及もみられた。しかしながら柳は，「沖縄の墳墓こそは沖縄の至寶」と述べ，特に「一つの名所」である辻原墓地の保存を訴えていた。観光客をはじめとする外来者が墓地の観光資源としての意義を見出す方で，一部の地元住民はそうした対象の破壊を求めていたのであり，墓地を観光客を受け入れる歓待の場とするか否かで異なる意見が存在していたことが認められた。そしてこうした那覇市の墓地は，戦後の米軍統治下において，祖先崇拝との関係でその存続を求める意見も存在するものの，大きな反発もなく取り壊され，郊外の識名霊園に集約されることになったことがわかった。

そして，米軍統治下においては，墓地を対象とした観光の場所は，沖縄本島南部に移動することになった。同地域は沖縄戦の激戦地として多数の戦死者を生じさせており，その遺骨は慰霊塔に納骨されていった。そして各都道府県単位で多数の慰霊塔が建立されたことを背景に，1960 年代に同地への戦跡巡礼が盛んになっており，また 1965 年に「戦争の悲惨さをすべての人々に体得させ平和の尊さを認識させるとともに祖国のために散華した英霊を慰める」ことを特色とする沖縄戦跡政府立公園にかかる地域が指定されたように，ここは社会的に死を対象とした観光地に位置づけられた場所となっていた。なかでもその焦点は，1962 年にはじめる日本政府からの資金援助によって整備の進んだ摩文仁の丘であり，そこには多数の慰霊塔が建立され，「日本の墓地」とも呼ばれていた。

こうしたなかで，遺骨については 1957 年に識名霊園に設立された中央納骨堂へ多くが漸次移動していったが，この地は慰霊の中心として戦跡観光の中心地であり続けたことが認められた。また，1964 年から 72 年まで観光客にとって沖縄で印象的なところの第一位がこの南部戦跡であったというデータもあり，そこはしばしば沖縄に同情して激しい悲しみの感情に襲われるという情動の場所になっていたことも判明した。そして，戦後も沖縄に存在していた在来の墓地は，避難所としての戦争との関係で語られるようになると共に，この南部戦跡への観光の道程のものが注目されるようになっていたこともわかった。こうした墓地を対象とする観光は，沖縄の観光振興を図る上で内容的にその限界も指摘されてはいたが，当時の社会的状況の中で，沖縄南部地域に社会的に空間化され，同地の主要な観光対象となっていたことも理解された。

しかしながら，沖縄の本土復帰以降は，このような南部戦跡を巡る観光が，国家の英霊を崇める軍国主義的なもので，住民の戦争体験を等閑視したものとして批判されるようになったことが認められた。そして，軍人の死の場所の象徴である摩文仁の丘が観光コースの焦点となっていることが批判されるようになり，ガマを中心とする住民の戦争体験の場へ戦跡観光地を移動させようとする取り組みがおこなわれるようになったことがわかった。また近年では，死を対象とする観光についての Dark Tourism という海外の概念を移入し，それを「人類の悲しみの記憶をめぐる旅」という啓蒙的な概念に再構成した「ダークツーリズム」として，ひめゆりの塔をはじめとする慰霊碑をまた異なる意味で解釈する動きも存在していることが認められた。

このように，墓地という死と関連した観光地は，政治的状況も関わるなかで，その場所が移動すると共に意味づけも変容していることがわかった。こうした場所は，時に政治的問題とも結びついてしまうその意味づけがために，観光客の歓待にかかる場としては非常に不安定な状況におかれており，とりわけ変化にさらされる傾向にあることが理解された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 神田　孝治，沖縄本島における墓地を対象とした観光の生産とその変容―移動に注目したダークツーリズムの考察，観光学評論，　査読有，　5 巻 1 号，　2017，93-110．
② 神田　孝治，与論島への観光と『たそがれる』，地理，査読無，60 巻 6 号，2015，12-19．
③ 神田　孝治，観光地と歓待―与論島を事例とした考察，観光学評論，　査読有，　3 巻 1 号，　2015，　3-16．

〔学会発表〕（計　4　件）

① 神田　孝治，沖縄本島における墓地を対象とした観光の生産とその変容―移動に注目したダークツーリズムの考察，観光学術学会大会，　2016 年 7 月 9 日，立命館大学
② 神田　孝治，沖縄本島における死にまつわる場所を対象とした観光の社会的生産とその変容，　人文地理学会大会，　2015 年 11 月 15 日，　大阪大学
③ Koji KANDA，　Recreating traditional culture for hospitality: a case study of “YORON KENPO” on Yoron Island in Japan，　7th East Asian Regional Conference in Alternative Geography，2014年7月25日，Osaka City University Medical School
④ 神田　孝治，観光地とホスピタリティ―与論島を事例とした考察，観光学術学会大会，　2014 年 7 月 6 日，　京都文教大学

６．研究組織

(1)研究代表者

神田　孝治　（KANDA, Koji）
和歌山大学・観光学部・教授
研究者番号：90382019